慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自己意識の類型化とアイデンティティ形成の関連： 青年期の自己否定性に着目して
Sub Title	Correlations between types of self-consciousness and identity formation : from the perspective of self-denial in adolescence
Author	金子, 智昭(Kaneko, Tomoaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2018
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.85 (2018.) ,p.57- 68
JaLC DOI	
Abstract	The authors conducted an exploratory study on the multifaceted aspects of selfconsciousness in late adolescent youth and investigated correlations between selfconsciousness and self-denial in the process of identity formation. 460 university students (121 men and 339 women), participated in the investigation. Public and private self-consciousness, and private self-consciousness showed positive effect on all three identity indexes, whereas public self-consciousness displayed negative effect on current commitment by multiple regression analysis. Participants were classified into three groups through cluster analysis that identified them as possessing high, midlevel, and low self-consciousness. A chi-square test was conducted on each cluster and identity status. More, one-factor ANOVA was performed using self-denial as a dependent variable. The results indicated : (1) Students with high self-consciousness demonstrated elevated levels of self-denial. However, their sense of identity showed adequate formation and maturity. (2) Students with low self-consciousness exhibited lesser levels of self-denial, but their identity formation was delayed. Students with high self-denial might seem to be maladaptive. Nonetheless, when this abnegation is combined with greater than normal self-consciousness and the consciousness of conflicts and worries about the future, they might strongly desire to form an identity. On the other hand, students with low self-consciousness are highly satisfied with themselves, and their consequent avoidance of serious self-exploration might make them lose future perspective and orientation.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000085-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自己意識の類型化とアイデンティティ形成の関連

―青年期の自己否定性に着目して―

Correlations between types of self-consciousness and identity formation

―From the perspective of self-denial in adolescence―

金　子　智　昭[*,**]

Tomoaki Kaneko

The authors conducted an exploratory study on the multifaceted aspects of self-consciousness in late adolescent youth and investigated correlations between self-consciousness and self-denial in the process of identity formation. 460 university students (121 men and 339 women), participated in the investigation. Public and private self-consciousness, and private self-consciousness showed positive effect on all three identity indexes, whereas public self-consciousness displayed negative effect on current commitment by multiple regression analysis. Participants were classified into three groups through cluster analysis that identified them as possessing high, mid-level, and low self-consciousness. A chi-square test was conducted on each cluster and identity status. More, one-factor ANOVA was performed using self-denial as a dependent variable. The results indicated: (1) Students with high self-consciousness demonstrated elevated levels of self-denial. However, their sense of identity showed adequate formation and maturity. (2) Students with low self-consciousness exhibited lesser levels of self-denial, but their identity formation was delayed. Students with high self-denial might seem to be maladaptive. Nonetheless, when this abnegation is combined with greater than normal self-consciousness and the consciousness of conflicts and worries about the future, they might strongly desire to form an identity. On the other hand, students with low self-consciousness are highly satisfied with themselves, and their consequent avoidance of serious self-exploration might make them lose future perspective and orientation.

Keywords: self-consciousness, identity formation, self-denial, adolescence, cluster analysis

キーワード：自己意識，アイデンティティ形成，自己否定性，青年期，クラスター分析

* 埼玉純真短期大学こども学科助教

** 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程3年

1．問題と目的

Erikson（1959）は，青年期は自己を模索し主体的な職業選択を行う心理社会的モラトリアム（psychosocial moratorium）の時期であると指摘し，この時期の発達課題として，アイデンティティ（identity）の確立を掲げている。アイデンティティとは，「自分を自分たらしめている自我の性質であり，他者の中で，自分が独自の存在であることを認めると同時に，自分の成育史から一貫した自分らしさの感覚を維持できている状態」（岡本，1994）と定義される。このようなアイデンティティの感覚は，自己アイデンティティ（self-identity）を，現実社会の中でどれほど有効であるかを試す役割実験を繰り返した後，自分が社会で認められる存在であるという心理社会的アイデンティティ（psychosocial-identity）が感じられることで培われる（溝上，2012）。そして，アイデンティティが確立されることで，青年は自分なりの価値観や人生目標を持ち，自己の主体性や独自性が感じられるようになる（高木，1992）。

Marcia（1964）は，職業とイデオロギー（宗教，政治）の2領域に関するアイデンティティ形成の程度を，「同一性達成（identity achievement）」，「モラトリアム（moratorium）」，「早期完了（foreclosure）」，「同一性拡散（identity diffusion）」の4つに分けたアイデンティティ・ステイタス理論を提唱し，Eriksonの心理社会的発達理論を実証研究の俎上に載せた。その後，Waterman（1982）は，アイデンティティ・ステイタスの変化経路に関するアイデンティティ発達の連続的パターンモデルを提示した。Waterman（1982）によりモデルが提示されると，次第にステイタスの変化に関与する要因やステイタスの移行に伴う構造の変化に着目したモデルが検討されるようになった（杉村，2005）。例えば，Grotevant（1987）は，青年期後期におけるアイデンティティ形成のプロセスモデルを提示し，アイデンティティ形成の方向性は，「個人的特徴（individual characteristics）」（パーソナリティ，認知能力，現在のアイデンティティ）と「発達の文脈（context of development）」（文化と社会，家族，仲間，学校と職場）の相互作用によって決定づけられると論じた。Grotevant（1987）のモデルでは，アイデンティティ発達の詳細なメカニズムには踏み込んでいないが，ステイタスの変化における作用を記述した最初のモデルとして評価されている（杉村，2005）。

Grotevant（1987）は，アイデンティティ形成に関与するパーソナリティを4つ（自尊感情，自己制御，自我の弾力性，経験と情報への開放性）想定しているが，自己意識（self-consciousness）もまたパーソナリティ変数の一つとして，アイデンティティ形成と関連することが分かっている。例えば，Hamer & Bruch（1987）は，Grotenvant（1987）のモデルを参考に，私的自己意識は早期完了を抑制し，モラトリアムを促進することを示している。また，Cheek & Briggs（1982）は，私的自己意識は個人的アイデンティティ（personal identity），公的自己意識は社会的アイデンティティ（social identity）と正の関連があることを示している。国内研究において，公的自己意識はアイデンティティの確立と負の関連があると報告されている（五十嵐・横田，2011; 金，2005）。また，天谷（2005）は，大学生において，過去に自我体験（「私はなぜ私なのか」「私はどこから来たのだろうか」という水準の「私」への問い）を経験している者は，私的自己意識が高いことを明らかにしている。

このように，自己意識とアイデンティティ形成とは一定の関連が示されているものの，今後の課題として，以下の2点を指摘できる。第一に，これまでの研究において，私的自己意識と公的自己意識の2つを別個の変数として扱っている研究はみられるが，個人の自己意識の様相を類型的に捉えた研究は為されておらず，結果として，どのような自己意識像の青年においてアイデンティティ・ステイタスが前

進しているのか等の臨床的な示唆が充分に得られていない点が挙げられる。第二に，アイデンティティ形成過程における自己否定性に着目した自己意識研究が見受けられない点を指摘できる。自己意識が高まる青年期は，理想的な自己像を求めることから，現実とのギャップを感じ，自己否定性が生じることは周知の事実である（榎本，2012; 梶田，1988など）。自己否定性は不適応と関連することから，マイナスのイメージを持たれやすいと考えられる。しかし，青年期の自己否定性は，自己を再構築する意義があり，自分を知るという生産的過程として意味を持つことや自己変容を促し自己形成意識を向上させる可能性が指摘されている（溝上，1999）。このように，青年は自己否定性を感じながらも自我を統合していくと考えると，自己否定性が高いことは望ましい一面とも捉えられる。しかし，アイデンティティ形成過程における自己否定性に着目した自己意識研究は，筆者の知る限り見受けられない。

そこで本研究では，青年期後期の大学生を対象に，学生の自己意識像を検出し，自己意識がアイデンティティ形成過程において自己否定性とどのような関連を示すのか明らかにすることを目的とする。

2.　方法

2.1　調査対象者及び手続き

関東圏内にある2校の大学の大学生487名を対象に，2013年の6月から7月にかけて質問紙調査を行った。回答は任意であり個人情報の保護を厳守することを伝えた後，無記名の個人記入形式の質問紙を大学の講義時間を活用して配布・回収した。質問紙の回答に不備のあった者を除いた460名（男性121名，女性339名; 1年生164名，2年生168名，3年生62名，4年生66名）を最終的な分析対象とした（有効回答率94.4%）。平均年齢は，19.47歳（SD＝1.28）であった。

2.2　調査内容

本調査では，「改訂版自己意識尺度」（金子，2017），「同一性地位判定尺度」（加藤，1983），「自尊感情尺度」（山本・松井・山成，1982）の3つの尺度を用いる。なお，自尊感情尺度においては，その逆転項目（e.g.,「自分は全くだめな人間だと思うことがある」）を，自己否定性の代理尺度として用いることにする。自尊感情尺度（山本他，1982）の逆転項目への回答は，「自己価値がないと思うか」という問いへの反応であり，否定的な自己像を意味することが指摘されており（福留・藤田・戸谷・小林・古川・森永，2017），自己否定性の代理尺度として用いることが可能と考えられる。

2.2.1　改訂版自己意識尺度（金子，2017）

本尺度は，「外見への意識」（「髪型を気にする」「自分の容姿に気をくばる」「自分の体型やスタイルを意識する」など8項目），「公私自己意識」（「相手を不快にさせないような接し方を考える」「相手の気持ちを察して，それに沿おうとする」「任される仕事に対して，責任を果たすことを意識する」など10項目），「私的自己意識」（「日ごろ，自分自身を理解しようと努めている」「自分が認識する物事の本質や意味について，じっくり考える」「自分がどんな人間か，過去の行動をもとに熟考する」など8項目），「行動スタイルへの意識」（「人から，自分がどのように思われているのか意識する」「自分についての噂に関心がある」「人からの評価は，あまり意識しない（逆転項目）」など5項目）の4下位尺度29項目からなる。

外見への意識と行動スタイルへの意識の2下位尺度は，従来の公的自己意識の概念が2つに細分化さ

れたものである。一方，公私自己意識は，「他者への情緒的態度や社会的役割を重視し，自己を他者や周囲との関係性の中で捉えようとする意識」と定義され，私的と公的の両自己意識を統合した概念と考えられている。

教示文は，「次の各項目は，あなたにどの程度あてはまるでしょうか。最も近いものの番号をひとつ選んで，○で囲んでください。」とした。評定は，「あてはまる（5点）」「ややあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」の5段階で回答を求めた。

2.2.2　同一性地位判定尺度（加藤，1983）

Marciaのアイデンティティ・ステイタスを測定する指標として用いた。本尺度は，「現在の自己投入」（「私は今，自分の目標をなしとげるために努力している」「私には，特にうちこむものはない（逆転項目）」「私は，自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている」など4項目），「過去の危機」（「私は，自分がどんな人間なのか，何をしたいのかということを，かつて真剣に迷い考えたことがある」「私は，親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない（逆転項目）」「私は以前，自分のそれまでの生き方に自信を持てなくなったことがある」など4項目），「将来の自己投入の希求」（「私は，一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている」「私は，自分がどういう人間であり，何をしようとしているのかを，今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている」「私には，自分がこの人生で何か意味あることができると思えない（逆転項目）」など4項目）の3下位尺度12項目からなる。これら3つの下位尺度は，アイデンティティ・ステイタスの状態を規定する要因である。

本尺度は，各下位尺度の得点を基準に，アイデンティティ・ステイタスを6つに分類することができる。各ステイタスへの分類の流れ図を，Figure 1に示す。加藤（1983）によると，各ステイタスの定義は以下の通りである。(a)「同一性達成地位」（過去に高い水準の危機を経験した上で，現在高い水準の

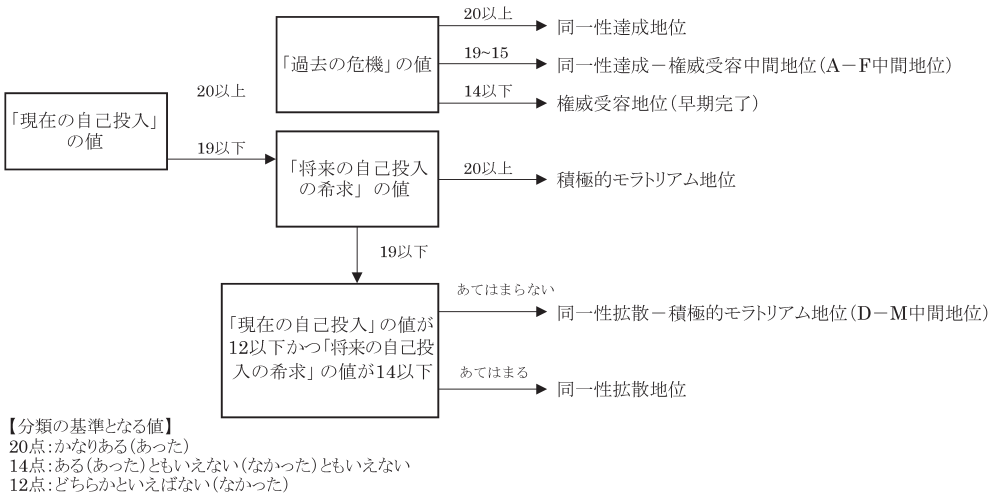

Figure 1　各同一性地位への分類の流れ図（加藤，1983より作成）

自己投入を行っている者），（b）「同一性達成－権威受容中間地位（A–F中間地位）」（中程度の危機を経験した上で，現在高い水準の自己投入を行っている者），（c）「権威受容地位（早期完了）」（過去に低い水準しか経験せず，現在高い水準の自己投入を行っている者），（d）「積極的モラトリアム地位」（現在は高い水準の自己投入は行っていないが，将来の自己投入を強く求めている者），（e）「同一性拡散地位」（現在低い水準の自己投入しか行っておらず，将来の自己投入の希求も弱い者），（f）「同一性拡散–積極的モラトリアム地位（D–M中間地位）」（現在の自己投入が中程度以下の者のうちで，その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くないが，将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者），である。なお，A–F中間地位は同一性達成地位（achievement status）と権威受容地位（foreclosure status）の中間に位置するステイタス，D–M中間地位は同一性拡散地位（diffusion status）と積極的モラトリアム地位（moratorium）の中間に位置するステイタスのことを意味している。

教示文は，「これは，現在大学生であるみなさんの生き方，状態，気持ちについてのアンケートです。以下のそれぞれの文を読み，あてはまるものに○をつけてください。」とした。評定は，「まったくそのとおりだ（6点）」「かなりそうだ（5点）」「どちらかといえばそうだ（4点）」「どちらかといえばそうではない（3点）」「そうではない（2点）」「全然そうではない（1点）」の6段階で回答を求めた。

2.2.3　自尊感情尺度（山本他，1982）

本尺度は1因子10項目からなる。本研究では，自己否定性を測定するために，逆転項目の5項目（「自分は全くだめな人間だと思うことがある」「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う」「自分には自慢できるところがあまりない」「敗北者だと思うことがよくある」「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」）のみを用いた。

教示文は，「次の特徴のおのおのについて，あなた自身にどの程度あてはまるかお答え下さい。他からどう見られているかではなく，あなた自身をどのように思っているかをありのままにお答え下さい。」とした。評定は，「あてはまる（5点）」「ややあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」の5段階で回答を求めた。

3.　結果

3.1　記述統計量

本調査で用いる各変数の平均値，標準偏差，α係数，得点範囲をTable 1に示す。全ての変数の平均値が，得点範囲の中央値を超えていた。本研究の対象者は大学生であり，青年期特有の自己への関心の高まりが，高い平均値の要因と考えられる。また，信頼性係数は，過去の危機（$\alpha=.64$）と現在の自己投入の希求（$\alpha=.65$）において若干低かったが，その他の変数は概ね高い値が示された。

性差と学年差について検討するために，2要因（性別×学年）の分散分析を行った（Table 2）。有意な差がみられた変数については，TukeyのHSD法による多重比較を行った。全ての変数において，性別と学年による交互作用は有意ではなかった。性別の主効果は，外見への意識（$F(3, 456)=49.37$, $p<.001$），公私自己意識（$F(3, 456)=17.93$, $p<.001$），行動スタイルへの意識（$F(3, 456)=8.22$, $p<.01$），将来の自己投入の希求（$F(3, 451)=27.00$, $p<.01$）でみられ，いずれも女性の方が男性よりも高かった。女性の方が自己への注目や将来への意識が高い傾向にあるといえる。学年の主効果は，将来の自己

Table 1　各変数の記述統計量およびα係数

	平均（*SD*）	α係数	得点範囲
【改訂版自己意識尺度】			
外見への意識	3.94（.72）	.88	1–5
公私自己意識	4.09（.52）	.84	1–5
私的自己意識	3.51（.66）	.77	1–5
行動スタイルへの意識	3.40（.69）	.78	1–5
【同一性地位判定尺度】			
現在の自己投入	4.10（.92）	.74	1–6
過去の危機	4.18（.77）	.64	1–6
将来の自己投入の希求	3.98（.72）	.65	1–6
自尊感情	2.98（.72）	.85	1–5

Table 2　改訂版自己意識尺度・同一性地位判定尺度・自己否定性の各得点の2要因分散分析（性別×学年）

	1年生		2年生		3年生		4年生		分散分析（*F*値）		
N=460	男性（*n*=43）	女性（*n*=121）	男性（*n*=31）	女性（*n*=137）	男性（*n*=20）	女性（*n*=42）	男性（*n*=27）	女性（*n*=39）	性差	学年差	交互作用
【改訂版自己意識尺度】											
外見への意識	3.52	4.05	3.47	4.13	3.75	4.04	3.42	4.12	49.37***	0.41*n.s.*	1.13*n.s.*
	(.91)	(.61)	(.95)	(.56)	(.71)	(.74)	(.69)	(.57)	女性＞男性		
公私自己意識	3.91	4.14	3.92	4.13	3.81	4.12	3.99	4.22	17.93***	0.74n.s.	0.11*n.s.*
	(.71)	(.49)	(.63)	(.46)	(.58)	(.41)	(.54)	(.38)	女性＞男性		
私的自己意識	3.41	3.51	3.43	3.44	3.55	3.62	3.37	3.78	3.86*n.s.*	1.05*n.s.*	1.31*n.s.*
	(.72)	(.64)	(.81)	(.65)	(.57)	(.57)	(.63)	(.63)			
行動スタイルへの意識	3.94	4.15	3.67	4.01	3.84	4.01	3.74	3.98	8.22**	1.04*n.s.*	0.34*n.s.*
	(.74)	(.64)	(.89)	(.67)	(.61)	(.70)	(.51)	(.67)	女性＞男性		
【同一性地位判定尺度】											
現在の自己投入	4.23	3.95	4.05	4.02	4.26	4.28	4.19	4.31	0.18*n.s.*	1.39*n.s.*	0.84*n.s.*
	(.90)	(.92)	(1.24)	(.80)	(1.00)	(1.03)	(1.03)	(.70)			
過去の危機	4.18	4.08	4.33	4.11	4.20	4.30	4.27	4.35	0.17*n.s.*	1.12*n.s.*	0.77*n.s.*
	(.80)	(.77)	(.87)	(.76)	(.82)	(.73)	(.76)	(.72)			
将来の自己投入の希求	3.74	3.88	3.87	4.05	3.98	4.22	3.91	4.21	27.00**	15.12*	0.19*n.s.*
	(.96)	(.68)	(.96)	(.62)	(.81)	(.70)	(.72)	(.49)	女性＞男性	3年生＞1年生	
自己否定性	3.17	3.54	3.33	3.41	2.88	3.33	3.06	3.19	7.65*n.s.*	2.33*n.s.*	1.12*n.s.*
	(.87)	(.65)	(.91)	(.82)	(.93)	(.71)	(.77)	(.66)			

$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$
注：（　　）内は標準偏差を示す.

投入の希求（F (3, 451)＝15.12, $p<.05$）でみられ，3年生の方が1年生よりも高かった。3年次には就職活動を迎える学生が多く，このことが将来への自己関与を高めていると考えられる。

3.2　自己意識とアイデンティティ形成および自己否定性との関連

改訂版自己意識尺度の各変数と同一性地位判定尺度の各変数および自己否定性の相関係数を求めた

Table 3　アイデンティティ形成および自己否定性に及ぼす自己意識の影響

	アイデンティティ形成						自己否定性	
	現在の自己投入		過去の危機		将来の自己投入の希求			
	r	β	r	β	r	β	r	β
外見への意識	.029	−.036	.063	−.081	.148**	.075	.076	−.095
公私自己意識	.311**	.329***	.273**	.165**	.240**	.140**	.059	.009
私的自己意識	.243**	.195***	.412**	.361***	.306**	.261***	.094*	−.053
行動スタイルへの意識	−.068	−.221***	.148**	.023	.089	−.068	.365**	.423***
R^2		.164***		.192***		.118***		.145***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

(Table 3)。外見への意識は将来の自己投入の希求と正の関連（r=.148, p<.01），公私自己意識とは同一性地位判定尺度の3つの変数と正の関連（r=.240〜.311, p<.01），私的自己意識は同一性地位判定尺度の3つの変数および自己否定性と正の関連（r=.094〜.412, p<.01, .05），行動スタイルへの意識は過去の危機および自己否定性と正の関連（r=.148〜365, p<.01）が得られた。

次に，自己意識の4つを独立変数，現在の自己投入，過去の危機，将来の自己投入の希求，自己否定性のそれぞれを従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 3)。決定係数は，R^2=.118〜.192（p<.001）となり，全てにおいて有意だった。標準偏回帰係数について，公私自己意識は，現在の自己投入（β=.329, p<.001)，過去の危機（β=.165, p<.01)，将来の自己投入の希求（β=.140, p<.01）に正の影響を与えていた。私的自己意識は，現在の自己投入（β=.195, p<.001)，過去の危機（β=.361, p<.001)，将来の自己投入の希求（β=.261, p<.001）に正の影響を与えていた。行動スタイルへの意識は，現在の自己投入（β=−.221, p<.001）に負の影響，自己否定性（β=.423, p<.001）に正の影響を与えていた。外見への意識は，影響を与えていなかった。

3.3　自己意識の類型化の探索的検討

自己意識の4つの下位尺度を標準化し，その値に基づいて，Ward法によるクラスター分析を行った(Figure 2)。各クラスターに含まれる対象者の数，抽出されたデンドログラム及びクラスターの解釈可能性を考慮した結果，3クラスターによる分類が自己意識の様相を捉えるのに適当と考えられた。

次に，自己意識の各クラスターの特徴を検討するために，自己意識の各クラスターを独立変数，改訂版自己意識尺度の4つの変数を従属変数とする一要因分散分析を行った（Table 4)。その結果，外見への意識（F(2, 457)=93.21, p<.001)，公私自己意識（F(2, 457)=123.05, p<.001)，私的自己意識（F(2, 457)=117.29, p<.001)，行動スタイルへの意識（F(2, 457)=225.91, p<.001）において有意差がみられた。TukeyのHSD法による多重比較を行った結果，第1クラスターは，外見への意識，公私自己意識，行動スタイルへの意識において，その他2群の中間に位置していたことから，「自己意識中群」(237名; 51.52%）と命名した。第2クラスターは，外見への意識，公私自己意識，行動スタイルへの意識において，その他2群より低かったことから，「自己意識低群」(99名; 21.52%）と命名した。第3クラスターは，外見への意識，公私自己意識，私的自己意識，行動スタイルへの意識の全てにおいて，その他2群

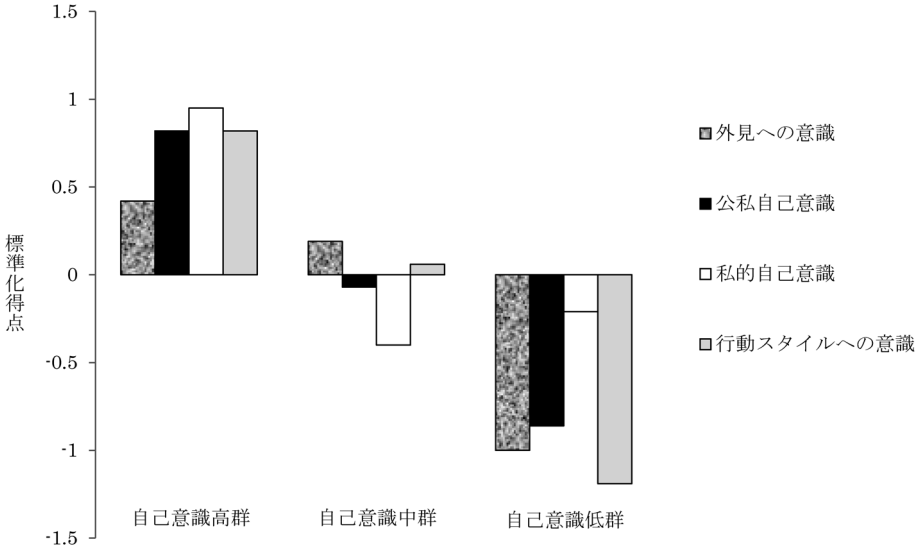

Figure 2　自己意識の各クラスターの特徴

Table 4　各自己意識群の改訂版自己意識尺度の基本統計量と一要因分散分析

	自己意識高群 (n=124)	自己意識中群 (n=237)	自己意識低群 (n=99)	F値	多重比較 (5%水準)
外見への意識	4.32	4.03	3.24	93.21***	高群＞中群＞低群
	(.55)	(.50)	(.81)		
公私自己意識	4.39	4.10	3.65	123.05***	高群＞中群＞低群
	(.40)	(.41)	(.56)		
私的自己意識	4.17	3.13	3.38	117.29***	高群＞中群・低群
	(.43)	(.42)	(.63)		
行動スタイルへの意識	4.55	4.14	3.12	225.91***	高群＞中群＞低群
	(.43)	(.43)	(.62)		

***p<.001
注:（　　）内は，標準偏差を示す.

より高かったことから「自己意識高群」(124名; 26.95%）と命名した。

3.4　各自己意識群とアイデンティティ・ステイタスおよび自己否定性の関連

各同一性地位への分類の流れ図（Figure 1）に沿って，「同一性拡散」「D－M中間地位」「モラトリアム」「早期完了」「A－F中間地位」「同一性達成」の6つのステイタスに分類した。自己意識の各クラスターとアイデンティティ・ステイタスの関連を検証すために，χ^2検定を行った結果，双方に有意な関連が示されたため（χ^2=50.04, p<.001, df=10, N=460)，残差分析を行った（Table 5)。なお，有意確率の基準は，篠原（1989）に従い，標準化された残差成分の絶対値が1.65以上なら10%水準，1.96以上なら5%水準，2.58以上なら1%水準で有意差があると定めた。その結果，自己意識高群は，モラトリアム，同一性達成の度数が有意に高く，D－M中間地位の度数が低かった。自己意識中群は，D－M中間

Table 5　各自己意識群とアイデンティティ・ステイタスのχ^2検定―クロス集計表および残差分析―

		自我同一性地位						合計
		同一性拡散（D）	D–M 中間地位	モラトリアム（M）	早期完了（F）	A–F 中間地位	同一性達成（A）	
自己意識高群	度数	6	69	16	2	12	9	124
		(4.83%)	(55.64%)	(12.90%)	(1.61%)	(9.67%)	(7.25%)	(100%)
	調整済み残差	−1.53	−3.53**▽	4.09**▲	−0.50	0.34	4.28**▲	
自己意識中群	度数	17	183	8	6	17	6	237
		(7.17%)	(77.21%)	(3.37%)	(2.53%)	(7.17%)	(2.53%)	(100%)
	調整済み残差	−0.70	4.25**▲	−2.17*▽	0.54	−1.35	−3.84**▽	
自己意識低群	度数	14	62	2	2	12	7	99
		(14.14%)	(62.62%)	(2.02%)	(2.02%)	(12.12%)	(7.07%)	(100%)
	調整済み残差	2.51*▲	−1.35	−1.76†▽	−0.11	1.26	0.05	
合計		37	314	26	10	41	32	460

†$p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$
注1：有意確率の基準は，｜調整済み残差｜＞1.65なら$p<.10$, ＞1.96なら$p<.05$, ＞2.58なら$p<.01$とする．
注2：▲は有意に高いことを，▽は有意に低いことを示す．

Table 6　各自己意識群と自己否定性の一要因分散分析

	自己意識高群（n=124）	自己意識中群（n=237）	自己意識低群（n=99）	F値	多重比較（5%水準）
自己否定性	3.57 (.82)	3.35 (.71)	3.06 (.82)	11.95***	高群＞中群＞低群

***$p<.001$
注：（　　）内は，標準偏差を示す．

地位の度数が有意に高く，同一性達成，モラトリアムの度数が低かった。自己意識低群は，同一性拡散の度数が有意に高く，モラトリアムの度数が低かった。

最後に，自己意識の各クラスターと自己否定性との関連を検討するために，自己意識の各クラスターを独立変数，自己否定性を従属変数とする一要因分散分析を行った（Table 6）。その結果，$F(2, 456)=11.95$, $p<.001$で有意差がみられたため，TukeyのHSD法に多重比較を行った。自己意識高群，自己意識中群，自己意識低群の順に，自己否定性が高いことが明らかとなった。

4.　考察

本研究の目的は，大学生の自己意識像を検出し，自己意識がアイデンティティ形成過程において，自己否定性とどのような関連を示すのか明らかにすることであった。

はじめに，自己意識の各々の変数がアイデンティティ形成および自己否定性に及ぼす影響を検討した。その結果，自らの言動や評価に注目する行動スタイルへの意識は，目標や対象への努力の傾注を意味する現在の自己投入に対して，負の影響を与えていることが示された。金（2005）は，大学生において，公的自己意識はアイデンティティの確立に負の影響を与えることを示しており，公的自己意識はアイデンティティを確立する上で必要な「自己への注目」と「他者への注目」との間に不均衡を生じさせ

る要因であると述べている。また，公的自己意識は，「対自的同一性」（自分自身が目指すべきもの，望んでいるものなどが明確に意識されている感覚）と「対他的同一性」（他者からみられているであろう自分自身が，本来の自分自身と一致しているという感覚）というアイデンティティの自己－他者の両側面と，負の関連があることも明らかにされている（五十嵐・横田，2011）。本研究の結果は，これら先行研究の結果を追認したものと言えよう。一方で，私的自己意識と公私自己意識は，全ての変数に正の影響を及ぼしていることから，アイデンティティ形成を促す要因であることが示された。これまで，私的自己意識は個人的アイデンティティと正の関連があること（Cheek & Briggs, 1982）やモラトリアムを促進すること（Hamer & Bruch, 1987）が示されている。本研究では特に，公私自己意識と関連がみられたことは，特筆すべき点である。梶田（2004）は，青年期以降の人間形成において，自己執着的な意識のあり方を乗り越えて，社会の中での自己に目覚めることが課題であり，大局的には自己を社会で生かすという意識の方向転換が重要であると論じている。アイデンティティ形成においても，私的自己意識のような自己内省的な視点のみならず，公私自己意識のような社会的な観点からも自己を意識することが重要と考えられる。また，行動スタイルへの意識は自己否定性を促進することから，大学生において他者評価を過剰に意識することの問題性が窺がえた。

次に，大学生の自己意識の様相を捉えるために，クラスター分析を行った結果，自己意識高群，自己意識中群，自己意識低群の3クラスターが抽出された。各クラスターの特徴は，自己への関心や注意が向きやすいかどうか，すなわち，自己意識の量的側面の相違を捉えていた。続いて，各自己意識群とアイデンティティ・ステイタスの関連について，χ^2検定を行った結果，自己意識高群は，同一性達成とモラトリアムが高く，D－M中間地位が低いことから，アイデンティティ形成の状態が良好であることが示された。自己意識中群は，自己意識高群の関連パターンと相反しており，同一性達成とモラトリアムが低く，D－M中間地位が高いことから，アイデンティティ形成の状態はあまり良好ではなかった。自己意識低群は，同一性拡散が高く，モラトリアムが低いことから，アイデンティティ形成の状態に最も問題性があることが示された。続いて，各自己意識群と自己否定性の関連を検討した結果，自己意識高群，中群，低群の順に自己否定性が高いことが示された。以上の結果を整理すると，（a）自己意識が高い学生は，自己否定性も高いが，アイデンティティ形成の状態が良好であること，（b）自己意識が低い学生は，自己否定性も低いが，アイデンティティ形成の状態に問題があること，以上の2点が示唆された。榎本（2012）によると，真剣に自己探求する青年は，アイデンティティ拡散の危機を乗り越えて，やがてアイデンティティの確立に向かうとされる。自己意識高群の学生は，このような自己探索的な青年像を象徴しており，悩みや葛藤を抱えながらも，将来に対する主体的な選択を行おうと努力しているものと推察される。その一方，自己意識低群の大学生は，傾倒すべき目標それ自体を喪失しているにも関わらず，将来に対する主体的な選択や自己投入を回避している傾向が強いと考えられる。臨床場面において，自己否定性が高い学生は，一見すると不適応状態に陥っていると判断されるかもしれない。しかし，その学生の背後に自己意識の高さがみられる場合，将来への迷いや葛藤を抱きながらも，アイデンティティ形成を追求している姿として捉えることもできるだろう。その一方で，自己意識が低い学生は，現状の自分をある程度受容しながらも，真剣な自己探索を回避し，将来に対する進路を見失っている可能性が考えられる。

最後に，本研究の課題を3点述べる。第一は，大学生の自己意識像を追証することである。当初，クラスター分析の結果，自己への関心や注意の向け方（質的側面）の個人差が検出されると予想していた

が，本研究では自己意識の量的側面の相違が検出された。本研究の自己意識像は，必ずしも大学生一般の特徴を示しているとは言い切れず，対象者の属性により自己意識像も変化すると考えられる。今後は，この様なサンプリングの問題も考慮して検証を重ねていく必要がある。第二は，自己意識の高さと自己否定性の関連の媒介変数を明らかにすることである。自己意識高群は，理想的な自己像を強く追い求めており，現実自己とのギャップを感じるために，自己否定性も高いと推測される。しかしながら，こうした解釈は先行研究の論考に準ずるものであり，今後は現実－理想自己の差異を直接的に測定する必要があるだろう。第三は，自己意識の変容をねらいとした介入研究を行うことである。本研究では，主に自己意識がアイデンティティ形成に及ぼす効果を検証してきたが，今後は自己意識の変容を促す教育プログラムの実践と評価が必要と考える。本研究の結果に基づくと，自己意識が低い学生を対象に，私的自己意識と公私自己意識の両意識を向上させるような教育プログラムを展開することで，アイデンティティ形成に効果的な影響をもたらすであろう。

謝辞

貴重なお時間を割いてアンケートの回答にご協力して頂きました多くの学生の方々に，心より感謝の意を申し上げます。

引用文献

天谷裕子 (2005). 自己意識と自我体験―「私」への「なぜ」という問い―の関連―　パーソナリティ研究，13, 197–207.

Cheek, J. M., & Briggs, S. R. (1982). Self-consciousness and aspects of identity. *Journal of Research in Personality*, 16, 401–408.

榎本博明 (2012). 青年心理学　おうふう

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company.

福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林渚・古川善也・森永康子(2017).中学生におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の2側面―「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」―　教育心理学研究，65, 183–196.

Grotevant, H. D. (1987). Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, 2, 203–222.

Hamer, R. J., & Bruch, M. A. (1994). The role of shyness and private self-consciousness in identity development. *Journal of Research in Personality*, 28, 436–452.

五十嵐愛・横田正夫 (2011). 大学生における抑うつと自我同一性，公的自己意識との関連　日本大学心理学研究，32, 66–72.

金美怜 (2005). 韓国と日本の大学生における対人不安と同一性，公的自己意識，相互依存的自己との関係　パーソナリティ研究，14, 42–53.

梶田叡一 (1988). 自己意識の心理学（第2版）東京大学出版

梶田叡一 (2004). 自己意識心理学への招待（第2版）有斐閣ブックス

金子智昭 (2017). 大学生の自己意識に関する研究―改訂版自己意識尺度の作成と心理的適応の関連性―　慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要『人間と社会の探求』，84, 15–33.

加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造教育心理学研究，31, 292–302.

Marcia, J. E. (1964). *Determination and construct validity of ego identity status*. Unpublished doctoral dissertation. The Ohio University.

溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論―実証的心理学のパラダイム―　金子書房

溝上慎一 (2012). 青年心理学における自己論の流れ梶田叡一・溝上慎一（編）自己の心理学を学ぶ人のために　世界の思想社

岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究　風間書房

篠原弘章 (1989). 行動科学のBASIC第5巻ノンパラメトリック法　ナカニシヤ出版
杉村和美 (2005). 関係性の観点から見たアイデンティティ形成における移行の問題　梶田叡一（編）自己意識研究の現在2　ナカニシヤ出版
高木秀明 (1992). 青年期東洋・繁多進・田島信元（編）発達心理学ハンドブック　福村出版
Waterman, A. S. (1982). Identity development from adolescence to adulthood: An extention of theory and a review of research. *Development Psychology*, 18, 341–358.
山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，30, 64–68.